

2024年度（令和6年度）学校評価自己評価表

幸千中学校区	校番 15	福山市立御幸小学校
最終更新日		2024 年（令和6年）9月30日

I 福山市

ミッション

福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。

ビジョン

「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ○子どもに力をつけるために、先生方が新しい手法・ツールを模索しながら、多様な取り組みをされている。 ●保護者・地域住民への積極的な情報発信を行い、連携をさらに深めて欲しい。	児童生徒の現状 ●不登校出現率が高い。 ●体力テストにおいて、県の平均値以上の項目が少ない。 ○地域行事やボランティア活動に主体的に参加する児童・生徒が年々増えている。	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”) めざす子ども像 (義務教育修了時の姿)  中学校区として統一した取組等	思考力・創造力 表現力 思いやり 能動的市民性 ○主体的に学び よく考える児童生徒 ○思いやりのある児童生徒 ○自分なりに表現し伝え合う児童生徒 ○人や社会に貢献しようとする児童生徒 ○住み続けられる町づくりを考えることを目的にした学習を核に各教科と関連づけたカリキュラムを実施することで、めざす子ども像に迫る取組を行う。 ○生徒の実態を細やかに分析し、生徒のつまずきの要因に対応した指導と支援を行う。
--	---	---	---

III 自校

ミッション  一人一人が自立し、社会に貢献できる子どもの育成	育成する力 (21世紀型“スキル&倫理観”)  めざす子ども像	思考・想像力 自ら問いを見つけ、見通しを持って、調べたり考えたりしながら解決することができる。	表現力 目的や理由・根拠をとらえ、相手意識を持ち、自分の考えを伝えることができる。	思いやり お互いの立場や意見を尊重し、相手も自分も大切に、協働しながら生活を高めることができる。	能動的市民性 身の回りから課題を見つけ、学校生活をよりよくするために、仲間と協力して解決することができる。
学校教育目標 自ら考え 行動し 挑戦する児童の育成 ～自考・自行・自挑～	現 状 ・児童会が中心となり、学校行事などで相手意識を持ち、アイデア豊かに自ら考え挑戦していた。 ・「授業で考えることで、わからないことがわかるようになりましたか」92.4%…落ち着いた授業に向かう環境ができている。 一昨年度「友だちの意見につなげて発表していますか」47% 昨年度「学級の友達との話し合い活動を通して自分の考えを広げることができた」85%…特別活動を中心に様々な教科で話し合い活動を仕組んだ。 ・教師や大人の指示をよく聞いて動くことができる一方、自分から気づいて考え行動する力が十分ではない。 ・長期欠席児童は、昨年度29名。 ・地域の方々の学校への協力、愛着が強く、学校を支える風土が強い。一方宅地造成等で新たな居住者も激増し、困難な課題も増加している。	研究 テーマ 問いを持ち、「対話」を通して、学びを深める子どもの育成 ～付ける力を明確にした言語活動の充実～  内容等 特別活動、総合的な学習の時間を中心に児童が社会・世界をよりよく変えていく学びづくり 実生活と体験活動に基づいた言葉と数の理解を深める授業づくり・単元づくり	めざす授業の姿 児童自らが問いを持ち、つけたい力を明確にし、友達と協働しながら課題を解決して学びを深める授業		

## 福山市立御幸小学校

## Ⅳ 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

年 目	中期経営 目標	重 点	分 類	短期経営目標	目標達成に 向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)				
							□指標に係る 取組状況	加え 評価	達成 評価	改善方策	□指標に係る 取組状況 ◎短期(中期)経営 目標の達成状況	加え 評価	達成 評価	総合 評価
2	自ら学びに 向かう力、 学び続ける 力を育成す る。	★	継 続	児童が自ら問 いを持ち、教材・ 他者・自己との 対話を通して、「 分かった」「で きるようになった」 「考えが深ま った」という自 己の変容を実感 し、学力向上を 図る授業をつく る。	研究授業や校内研 修を通して、授業力 向上を図る。また、研 究主題と日々の教材 研究がつがるように 研修を行ったり、児 童の見取りを大切に したりすることで、 授業改善を行う。	・児童アンケート「授業 を通して考えること で、分からないことが 分かるようになったり 考えが深まったりし た。」90%以上 ・学期末到達率80点以 上(国・算) 80%以上	□児童アンケート「授業 を通して考えること で、分からないことが 分かるようになったり 考えが深まったりし た。」の肯定的評価 は88.7%であった が、表現力や活用力を 高めていく必要がある。 □学期末到達率80点 以上の割合は、国語6 6%、算数70%であ った。前年度と比較す ると、算数は数値が向 上している。しかし、 国語・算数ともに、授 業改善を行い、基礎・ 基本の学力の定着を 図る必要がある。	3	2	○学びの変容を意識し て、自分の言葉で授 業の振り返りを書か せる。また研究授業 や学び合い研修を通 して、職員同士で学 び合い、授業力向上 に努めていく。 ○国語・算数の授業づ くりにおいて、付け る力を明確にした言 語活動の充実を図 り、検証をする。 ○日々の授業づくり について写真や動画 をもとに、職員同士 で交流する機会を設定 し、対話を通して、 学び合い、授業改善 を進める。				
2	互いを認め 合える豊か な心を育成 する。	★	継 続	多様な人間関 係の中で様々な 価値観に触れる ことができるよ うに、多様な集 団での活動の場 を設定し、豊か なコミュニケー ション力を高め る。	縦割り班活動や、 1・6ペアなどのグ ループングを行っ たり、児童会を中心 として代表委員会を運 営したりし、組織的 な動きの中で自己の 役割を果たす。	・他学年の友達と協 力して掃除をし たり、休憩時間 には遊んだりす ることができた。 80%以上 ・委員会や係活動な どで自分の役割を果 たすことができた。 80%以上	□「他学年の友達と協力し て掃除をしたり、休憩時 間には遊んだりするこ とができた」の肯定的評 価は91.0%であった。 □「委員会や係活動など で自分の役割を果たすこ とができた。」の肯定的 評価は、 委員会→93.0% 係活動→95.6% であった。	3	3	○縦割り班で休憩時間 に遊ぶ「縦割り班遊 び」を設け、交流の場 を増やしたい。また、 お世話になった6年 生の卒業に向けて、 縦割り班で感謝の気 持ちは伝える取組を 計画・実行していく。 ○委員会活動や学級 での取組について、各 学級裁量にゆだねて いる部分が多いの で、代表委員会をよ り積極的に設け、学 校内の情報を共有し 改善につなげる。				
1	自分の生活 習慣を整 え、たくま しい心と体 を育成す る。	★	新 規	自分に必要な 体力要素を中心 に運動量を増や し、体力向上に 向けて意欲を高 めるとともに、 食事や睡眠につ いて生活を見直 し、健康への意	新体力テストの結果 を基に身に付けたい体 力要素を決め、体育科や 家庭学習での運動に取 り組む。 定期的に食事・睡眠・ 運動を意識して過ご せているか自己チェッ クを行い、それぞれの生活 習慣を高めることの良	・自分で決めた運 動に粘り強く取 り組み、楽しみなが ら体力を高めること ができた。 85%以上 ・規則正しい生活 習慣(食事・睡眠・ 運動)を意識して過 ごすことができた。	□全校で体力テストを実 施し、自分の課題となる 体力を高める運動に取 り組んだ結果、「自分で 決めた運動に粘り強 く取り組み、楽しみ ながら体力を高めるこ とができた。」の項目 では、児童の肯定的評	3	4	○児童は家庭学習とし ての運動に取り組ん でいる。委員会と連 携したり高学年に活 躍の場を与えたりす るなどして、「楽しん で運動する」機会を 前期より多く設けた い。 ○睡眠・食事について、 朝食や保健便り・食				

				識を高める。	さを児童や保護者に朝会や通信等で発信していく。	80%以上	価は86.4%であった。 □朝会・保健便り・食育便りの規則正しい生活の啓発活動や、月末に自分の生活を振り返ること で、「規則正しい生活習慣を意識して過ごすことができた。」の項目では、児童の肯定的評価は83.7%であった。			育便りで児童や家庭に向けて引き続き啓発する。休日や冬季休業の過ごし方についても、毎月の振り返りをしたり、宿題に生活を確かめられるような工夫をしたりして、児童が定期的に自己の生活について考えることができるようにする。					
2	児童は生き生きと学び、職員は生き生きと働く学校の創造		継続	学校の取組を校内外に積極的に発信し、地域、保護者、学校間で情報共有を図る。	保護者・地域を巻き込んだ教育活動を推進する。 取組の進捗や実態分析について、主任等による校内発信を活性化する。	・保護者アンケート「御幸」の取組に満足している」 90%以上 ・「仕事に意義ややりがいを感じている」 90%以上	□HPや通信、メール配信等でこまめに情報発信を行っている。ホームページやclassroomでは、学校行事や学年の取組を掲載し、日常的な様子を発信している。 □教育研究部や生徒指導部から定期的な通信を発信し、取組の共有を図っている。 □「仕事に意義ややりがいを感じている」職員は95%であった。	3	3	○今後も行事や各学年の取組を発信するとともに、生活科や総合的な学習の時間の取組の一環としてゲストティーチャーとの連携をして地域とのつながりを大切にしていく。学んだことをポスターや動画、リーフレットなどで発信していき、地域・保護者の皆様と連携を図ることができるようしていく。					

[プロセス評価の評価基準]		[達成評価の評価基準]		[総合評価の評価基準]		
評点	評価基準	評点	評価基準	評点	評価基準	
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。	5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。	5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。	4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。	4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。	3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。	3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。	2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。	2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。	1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。	1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。